＊＊

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No.41　　2016.6

＊＊

総会報告

北大総合博物館ボランティアの会　第 14 回総会、講演会および懇親会の報告　*在田 一則* ---- *1*

特別寄稿

新渡戸稲造と札幌遠友夜学校（第 5 回　最終回）　*藤田 正一* ---------------------------- *3*

談話会報告

宮坂 省吾氏の談話会報告　*沼田 勇美* -- *11*

活動報告

恐竜研究で初の日本古生物学会学術賞　*小林 快次* -------------------------------------- *12*

恐竜が繋ぐ北大総合博物館と鵡川町　*太田 晶* --- *13*

Let's しゃみチエン！～ポプラでつながる和洋の楽器～　*甲地 利恵* ---------------------- *14*

昔のお宝新聞データ・ベース（中間報告）　*久末 進一* ------------------------------------ *15*

その他の報告

総合博物館 展示リニューアル！　*山本 順司* -- *16*

北大総合博物館年次報告会　*石川 満壽夫* --- *16*

総 会 報 告

北大総合博物館ボランティアの会　第 14 回総会、講演会および懇親会の報告

ボランティアの会会長　　在田　一則

北大総合博物館ボランティアの会第 14 回(2016 年度)総会および講演会が 2016 年 5 月 27 日(金)16 時から新たに設けられた総合博物館 1 階の多目的スペースで開催されました。それに引き続き 3 階の新ボランティア控室(旧館長室、S224C)において懇親会が行われました。以下に簡単に報告いたします。

総会(16:00～16:30)

総会は 25 名が出席して行われました。会長挨拶の後、以下の 2015 年度活動報告および 2016 年度活動計画案の提案があり、承認されました。

昨年度は、耐震工事による休館が続いていることもあり、「ボランティア談話会」や「博物館に押しかけよう会」の開催回数は例年より少なくなりましたが、「ボランティア ニュース」は編集委員の皆さんのご努力により年 4 回の定期刊行を維持しました。また、後半は、各グループとも標本などの移動や整備に大わらわでした。

1. 2015 年度(2015 年 4 月～2016 年 3 月)の主な活動

(1)ボランティア談話会(1 回)

　第 31 回談話会(1 月 29 日、13 名参加)

　宮坂省吾氏(株式会社アイピー 地質情報室)

　遠友夜学校と豊平川の変遷

(2)博物館に押しかけよう会(2 回)

　第 21 回(8 月 29 日)北海道博物館(26 名参加)

　第 22 回（10 月 31 日）つきさっぷ郷土資料館（12 名参加）

(3)ボランティア ニュース(通常号 4 回)

　第 37 号(6 月 1 日発行)、第 38 号(9 月 1 日)、第 39 号(12 月 1 日)、第 40 号(3 月 1 日)

(4)その他

＊第 13 回総会、講演会および懇親会を 6 月 5 日に行った。

講師：菊田 融氏(北大総合博物館資料部研究員)
演題：札幌圏の自然史系施設連携によるプロジェクト紹介

＊新年会を1月29日に第31回談話会のあとに行なった。

＊ボランティアグループ連絡会(事務局)を原則として隔週金曜日の午後1時からS223（昨年9月からはN309：共同研究室)で開催した。しかし、休館が続いていることもあり、昨年度より開催数が少なかった。

2. 2016年度の活動予定

総合博物館の2016年7月26日リニューアルオープニングを目指し、各グループの指導教員のもとでボランティア活動を進めるとともに、「ボランティア談話会」や「博物館に押しかけよう会」を開催し、ボランティアどうしの交流をさらに図る。年4回発行が定着しているボランティア ニュースはボランティア間の情報交換の場、あるいはボランティア活動の広報の手段として、さらに充実させる。好評を得ている「○○先生小伝」シリーズは休館のため休載していたが、No.42(9 月発行)から、五十嵐恒夫名誉教授による「舘脇 操先生小伝」で再開する。

3. 2016年度の体制

＊グループ連絡会メンバー(全員留任)

在田一則(会長、展示改訂(地学))・沼田勇美(事務局長、図書)・星野フサ(植物)・志津木眞理子(昆虫)・(考古学)・寺西辰郎(展示改訂(地学))・(メディア)・今井久益(化石)・(北大の歴史展示)・児玉 諭(展示解説)・新妻美紀(チェンバロ)・大山圭也(平成遠友夜学校)・(リーフレット翻訳)・(4D シアター)・(第二農場)・(ハンズオン)・(きたみてガーデン)

＊ボランティア ニュース編集委員会(全員留任)

星野フサ(委員長)・今井久益・大山圭也・児玉諭・沼田勇美・山岸博子・石川満壽夫(顧問)

なお、ボランティアの各グループの在籍数は以下のとおり(2016年4月現在、延べ228名)。

植物資料(27 名)、昆虫標本(21 名)、考古学資料(31名)、展示改訂(地学)(5名)、メディアボランティア(3名)、化石標本(45名)、北大の歴史展示(1名)、展示解説(24名)、リーフレット翻訳(1名)、平成遠友夜学校(9名)、4D シアター運営(5名)、チェンバロ展示(11名)、図書室業務(18名)、第二農場(4名)、ハンズオン(8名)、きたみてガーデン(15名)

講演会(16:04～18:10)

講師：笠原　稔氏(北大名誉教授、元理学研究院附属地震火山研究観測センター 教授)
演題：札幌の地震

懇親会(18:20～20:30)

講演に引き続き、新ボランティア室(2階 S224C)において、笠原さんほか17名が参加して楽しく歓談した。

総会風景

札幌でも地震の備えを！と訴える笠原 稔先生

特 別 寄 稿

新渡戸稲造と札幌遠友夜学校（第５回　最終回）

北海道大学獣医学研究科名誉教授　　藤田　正一

前回、新渡戸の「学問より実行」という言葉に代表される人格主義的教育論の淵源が、クラーク博士の Boys, Be Ambitious にあること、そして、ともすれば、立身出世を目指せと取られかねないこの言葉の真意は、立身出世が目指すような私利私欲の充足や名声ではなく、知識や正義のため、世のため人のため、そして自分の人格を完成させるためにといった、より清く高邁な目標に向かって ambitious であれという教えであることを述べた。そして、奴隷解放のために南北戦争に出征したクラーク博士の思想の軸足は常に弱者の側に置かれていた。この教えの伝統こそが、新渡戸を育み、遠友夜学校を生み、学生教師たちの献身的な奉仕を生み、それを 50 年間にわたって継続させた原動力だった。

新渡戸稲造

それにしても、当時広く流布されていた「学問のすゝめ」に対して、なぜ新渡戸は貧しい子供達を前に、あえて「学問より実行」といったのだろうか。一つには、金がなくて、高等教育を受けることが不可能に近い子供達に、学問より大切なものがある。それは人格を磨くことだ。人はそのために学問するのだ。学校に行けなくても、人格を磨いて立派な人になりなさいという気持ちからであろうことは、既に述べた。新渡戸は働く若者を対象にした雑誌、『実業之日本』でも、「徳の貯蓄に至つては、職業の貴賤、金力の有無、社会階級の高下、身体の強弱に関係なく出来る。而も最初の種子は既に各自に有って居るから、今から、今晩からでも、直に積み始めることが出来る」と「人格、道徳性の涵養」の重要性を説いている。それだけなら、「学問のすゝめ」に対して挑戦的な「学問より実行」という言葉でなくても、「徳を積み、己の人格を磨きなさい」だけでも良かったのではないか。私の気持ちの中にこの疑問が長いことあった。

「学問のすゝめ」vs「学問より実行」

そこで、あらためて「学問のすゝめ」をひもとくと、冒頭の言は「**天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり**」であった。私の記憶からは「**と言えり**」がすっぽり落ちてしまっていた。これでは平等は福沢の信条ではなくて、「と言うことだ」という伝聞ではないか。

福沢諭吉

そして、「学問のすゝめ」とは、人は上下の差別無く生まれて来たはずなのに、世の中には貴賤上下の差がある。これひとえに学問したかしなかったかによる。立身出世のために学問しなさい。と言う趣旨のようだ。ここで既に私利私欲を排するクラーク博士の Boys, Be Ambitious の真意とは対立軸にある。勿論、新渡戸の、「学問とは人格の完成の為に行うものである」という考え方とも対照的だ。しかも、福沢は学問するだけの金も時間もある者に対して学問せよといっているのであって、貧しい人たちに学問しなさいと言っているのではない。貧者に同情して彼らに教育の機会を与

えよと言っているわけでもない。新渡戸のように学問するにも金のない子供たちに手を差し伸べるわけでもない。むしろ、福沢は貧者に学問させることを恐れた。**「最も恐るべきは貧にして智ある者なり」**（福沢諭吉「貧富痴愚の説」1889）と言っているのである。この言葉は福沢の軸足がどこにあるかを明確に示している。彼の設立した学校も高額の授業料で貧者教育には関係のない世界である。弱者の側に軸足をおく札幌農学校出身者に取っては福沢の立ち位置には違和感以上のものがあったに違いない。確かに「学問より実行」と「学問のすゝめ」はその言葉面だけでなく、その背景においても対立軸にあったのだ。

福沢諭吉は立派なこともたくさん言っている。それゆえ一般に尊敬もされるのだろう。ある人物が尊敬できるかできないかの判断は、その人物の言葉だけでなく、軸足がどこにあるのかをも見極めておく必要があるようだ。もっとも、軸足の立ち位置ゆえに尊敬できないと感じても、立派な言葉は言葉として、額面通り受け取り、学ばせて貰えば良い。因みに、新渡戸が福沢を尊敬していたとする新渡戸研究者がちらほらいる。しかし、その根拠は示されていない。新渡戸が福沢に言及した文章は多くはない。私の知る限りにおいては「東西相触れて」の前文と、新渡戸が三田で講演した時の講演録があるが、いずれも社交辞令程度の触れ方で、福沢の思想に至って評価をめぐらしたものではない。

内村鑑三

新渡戸と違ってはっきりとものをいう新渡戸の親友、内村鑑三に至っては、福沢を極めて露骨に「拝金宗」の宗祖呼ばわりしている。新渡戸は露骨には言わないが内村と同じ価値観を共有していると考えて良いだろう。

さて、福沢が恐れた「貧にして智ある者」を育てた遠友夜学校に話を戻そう。既に蝦名賢造がその著書で指摘しているように、この学校がなければ一生教育を受ける機会に恵まれなかったかもしれない貧しい子供達は、この学校ゆえに知識と教養を身につけ、人生の指針を与えられた。逆に、この学校の先生をしなければ、経験することも知ることもなかったかもしれない貧困に触れ、貧しい子供達との交わりによって、彼らに対するより深い理解と、社会の問題を考える機会を与えられた多くの北大生がいた。この遠友夜学校における実践を通して培われたヒューマニズムの精神は札幌農学校・北大の精神に少なからず良き影響を与えたに違いない。この札幌農学校と遠友夜学校の魂の交流を、学生先生と生徒たちの手記に見てみよう。

遠友夜学校の学生先生

若き頃、熱心な遠友夜学校教師であり、北大教授となって学生たちに慕われた石塚喜明名誉教授の言葉が、当時の学生教師たちの気持ちを雄弁に語っている。

石塚喜明

「そこには、教わる者よりも数冊の書を多く学んだ師と、昼間の疲れを忘れて机に向う生徒があるにすぎない。しかるに、教師も、生徒も、共に夜学校へ夜学校へと引かれるのは、何か。これ、夜学校に満ちみちた熱の力である。（中略）　何物をも焼きつくさねば止まない熱となり、これによって見るに足らない夜学校が、他の学校と異なった目に見えない効果をあげつつ、その特殊的存在を続けてきたのである。（中略）単に自ら（学生教師たち）の時間を、授業のために割愛するにとどまらない。課外の活動に、学校の経営に、教師への要求は無限であった。遊ぶ時間を割いた。

勉強時間を割いた。行事の忙しい時になると、放課後生徒に手伝わせて仕事を終り、生徒を自宅に送り、家に帰ってから、学生に帰って予習などをすると、睡眠時間がいくらもないことがあった。

時間の損失ばかりではない。電車切符を拝辞（辞退）した頃は、電車賃はもちろん、遠足の菓子代、学芸会の道具代、時には教材から因っている子供の文房具代まで、乏しい小遣いから出してやった。それも豊かな学資を受けている人だけではなく、夜学校の宿直によって下宿代を節約せねばならぬ、かつてどこかの夜学生生活を送った人々もいたのである。

そして卒業すると、記念だといって、自分の愛読書を、古本屋に売るかわりに夜学校の文庫に寄附し、月給をとると維持会員になった。（中略）犠牲だ、感謝だといわれると吃驚（きっきょう＝びっくり）した。自らが救われた、感謝したい気持だった。」（蝦名賢造著『札幌農学校　クラークとその弟子達』）

まさに新渡戸の求めていた犠牲を犠牲とは思わず、奉仕を奉仕と思わず、通ってくる子供たちへの愛に突き動かされて教壇に立ち、生徒達と交わっていた姿が想像出来る。犠牲や奉仕を負担と感じるときは本物ではないが、彼らの行為は本物だった。学生教師の一人、坂上福一の「為さざるを得ないが故に為すもの」と題した手記にはまさにこのことが書かれている。「『自分は夜学校を愛せざるを得ないが故に愛する』いわゆる犠牲とかいうものとは少し違うようだ。最も自然である。何故なら、自分自身が意識せずして没入し得るが故である。」（さっぽろ文庫 18『遠友夜学校』）

遠友夜学校の生徒たち

もと生徒の小寺アキさんの手記がある。

「夜学校へ行くのが嬉しくて、北５条東１丁目の会社から学校まで、走って行きました。雪の日などは下駄を脱いで、足袋はだしで走って行ったものです。有島先生には、一年生のとき、手を取って教えていただきました。一度も筆を持ったことのない私に、『筆はこう持つんですよ。』と言って教えて下さった筆の持ち方は、今でも私の身にしみ込んでいます。先生は毎日変わりました。農科大学の学生で自分の大切な勉強があるのに、その貴重な時間を割いて、一銭の報酬もないのに、遠い夜学校に来て教えて下さったことは、本当に有り難いことでした。この先生方の心は遠友夜学校の校歌の九番までの中に含まれていると思います。」（さっぽろ文庫 18『遠友夜学校』）

遠友夜学校の校歌とは 1898（明治 31）年、有島が学生教師だった頃に、作詞したものである。

有島武郎

遠友夜学校校歌　（有島武郎作詞）

一　沢なすこの世の楽しみの　楽しき極みは何なるぞ　北斗を支ふる富を得て　黄金を数へん其時か　　オー　否　否　否　　楽しき極みはなほあらん。

二　剣はきらめき弾はとび　かばねは山なし血は流る　戦のちまたのいさほしを　我身に集めし其時か　　オー　否　否　否　　楽しき極みはなほあらん。

三　黄金をちりばめ玉をしく　高どのうてなはまばゆきに　のぼりて貴き位やま　世にうらやまれん其時か　　オー　否　否　否　　楽しき極みはなほあらん。

四　楽しき極みはくれはとり　あやめもたへなる衣手か　やしほ味よきうま酒か　柱ふとしき家くらか　　オー　否　否　否　　楽しき極みはなほあらん。

五　正義と善とに身をささげ　欲をば捨てて一筋に　行くべき路を勇ましく　真心のままに進みなば　　アー　是れ　是れ　是れ　是れこそ楽しき極みなれ。

六　日毎に業にいそしみて　心にさそふる雲もなく　昔の聖今の大人（うし）　支へとなしていそしまば　　アー　是れ　是れ　是れ　是れこそ

楽しき極みなれ。

七　楽しからずや天の原　そら照る星のさやけさに　月の光の貴さに　心をさらすその時のアー　是れ　是れ　是れ　是れこそ楽しき極みなれ。

八　そしらばそしれつゞれせし　衣をきるともゆがみせし　家にすむとも心根の　天にも地にも恥ぢざれば　　アー　是れ　是れ　是れ　是れこそ楽しき極みなれ。

九　衣はやがて破るべし　えひぬる程もつかの間よ　朽ちせてやまじ家倉も　唯我心かはらめやアー　是れ　是れ　是れ　是れこそ楽しき極みなれ。　　（さっぽろ文庫 18『遠友夜学校』）

一番は、沢山あるこの世の楽しみの中で、最も楽しいものは何か、北極星に届く程の富を得て、そのお金を数えるときか。いやいや、もっと楽しいことが他にある。と、金銭に対する執着を否定し、二番では、戦の勲功・名誉がそうかと問い、これも否定。三番は高い地位を得るときかと問いこれも違うと言う。四番で、綺麗な衣装や、美味酒や、豪邸も否定。五番で、正義と善のために献身し、無欲に勇ましく真心のままに行くべき道を進むときこそ、楽しみの極みである。六番では昔の聖人や今の大人と呼ばれるような立派な人の心を支えとして日常に励むとき、七番では、夜空の星や月の光を見上げ、自分の心を晒しても恥ずかしくない清らかな心を持つとき、八番では、つぎはぎだらけの衣を着、ボロ屋に住んでいようとも、天に恥じない心を持っていると確信出来る時、そして、九番では美しい衣もやがてはやぶれてしまう。美酒に酔って気持ち良くなるのも束の間である。家や倉もやがては朽ちてしまう。でも、自分の今の心は決して変わらない。これが楽しい極みである。と謳っている。

この歌詞をみると、既に紹介した、クラーク博士の言葉、Boys, Be Ambitious の真意と同じ思想を平易な言葉で歌い込んでいることが分かる。有島が作詞したのは 1898 年であるから、その頃から既に札幌農学校・北大ではこのような精神が大学の雰囲気の中に生きていたことを伺わせる。学生教師たちは、自分が札幌農学校で身に付けたこのような精神や価値観を遠友夜学校の生徒たちにも伝えたのだ。この校歌は授業のはじまる前や休み時間によく歌われたと言う。有島は 1922 年、父の残した広大な有島農場を無償で小作人に解放した。彼が遠友夜学校の校歌に歌い込み、また教師として教えた精神の実践であった。

遠友魂

遠友夜学校の生徒たちも、校歌の歌詞や先生の話など、この学校で学んだ価値観を「遠友魂」とよんで大切にしていた。その成り立ちを見てみよう。

- ■ 札幌農学校／北大の学生たちは札幌農学校精神（自由平等、自主独立の精神、博愛、弱者に対する優しい視線）を持って遠友夜学校の教育に献身した。
- ■ 生徒を人間として対等に遇した。
- ■ 自然に札幌農学校の精神は遠友夜学校の生徒にもリレーされた。
- ■ 校是「リンカーンに学べ」：「何人にも悪意を抱かず、全ての人に慈愛を」
- ■ 「学問より実行」人格の完成を目指せ
- ■ 「働きながらでも学ぶ」
- ■ 「貧困を恥じることはない」
- ■ 「地位や生まれや財産よりも人格」
- ■ 「努力の尊さ」
- ■ 「社会への奉仕の尊さ」
- ■ ボロを纏っても、心根が美しければ恥じることは無い。「正義と善」
- ■ 学校の設備もととのっていない故に学ぶことも多い。創意工夫や応用が自然と身に付いた。
- ■ ランプのホヤ磨きからストーブの手入れ、掃除、そして生徒募集まで生徒が手伝った。自分たちの学校という帰属意識、互助意識、協同意識が育った。
- ■ 貧困故の清さ＋貧困故の苦悩、思いやりの心
- ■ 「正義は堂々と主張せよ」という札幌農学校精神はそのまま遠友魂の一部となって、札幌遠友夜学校の弁論活動の輝かしい成績（全道大会優勝）に反映されている。

このようなことの積み重ねが遠友魂を形作って行った。

かつて遠友夜学校の学生教師をした故高倉新一郎北大名誉教授が「北海道社会福祉・第一巻・第二号」に掲載した**「札幌遠友夜学校」**と題した一文がある。そこに遠友夜学校卒業生が、閉校寸前となってしまった夜学校50周年記念に際して、突如立ち上がって語った言葉が記載されている。

「私は波乱の多い一生を持ちました。然しこの間私をして堕落させなかったものは実に二年間遠友に学んだ事によったのであります。八年間の学校生活中で一番私に大なる印象と感化を与えたものは遠友二カ年の生活であります。二十歳前後の若い先生たちの清らかな純情と激しい熱情こそは強く強く私たちを動かしました。此処で私は生まれて初めて一箇の人格として認められ、非常に有難く思いました。日曜毎に先生は生徒を連れて郊外へ遠足に出かけました。そのとき、先生は自分の包みの中から饅頭やお菓子を取り出して手ずから私たちに分けて下さった。貧しい家に育ち、こんな深い愛情に触れたことのない私たちはどんなにか感激したか判りません。豊平川の月見の時、美しい月の光に照らされながら、先生からいちいち指して貰って、星の話をして戴いたことは今でも忘れません。授業中に一生徒がそば屋へ入って居たことを知った足助素一先生は、一時間ぶっ続け涙を流して説諭されました。生徒一同も共に涙を流して泣いてしまいました。当時教えを受けた先生方が、いずれも後には人格を以て世に知られて居ります事は、われわれの大なる誇りであります。この間或人が『某（遠友夜学校卒業生）は馬鹿だ。一寸闇をやれば十万、 二十万は儲かったのに、彼は偏屈者だから闇をやらずそのために機会を逸してしまった』と話しました。彼なら絶対闇などする男ではありません。夜学校で若い先生の純情に育てられた彼なのですから…」

まさに遠友魂の実践がここにある。高倉新一郎は書いている：**「この言葉は出席者の魂を深くゆさぶった。五十年のささやかな仕事が仇ではなかったのである」**。この文章が示すように、遠友夜学校卒業生は大富豪にはならなかったが、清く、正直に、誇り高く、堂々と人生を生きた。また、学生教師をした北大生達が、「いずれも後には人格を持って世に知られるように」なったのも、ここで教え、実社会の厳しさに直面し、多くの経験を得たことによるものであった。遠友夜学校は貧しい子供たちの教育の場であると同時に、若い大学生達の教育の場でもあったのだ。

遠友夜学校の終焉

この学校は札幌市民から強い支援を受け、一時は宮内省からもお下賜金をいただくようにまでなった。しかし、日本の国が戦争へと突き進む中、教師役だった北大生は兵隊や勤労動員にかり出され、夜学校の経営は難しくなる一方であった。そんな中、**「遠友夜学校でも軍事教練を課せ」**と言う通達が来た。昭和17年のことである。しかし、新渡戸稲造の平和主義を貫いて遠友夜学校はこの通達には従っていない。

戦時下、国は一つの教育方針の下に全国民を統制

高倉新一郎（左）と半沢洵

する体制を着々と進めた。当時の状況を高倉新一郎教授は次のように述べている。

「札幌市でも、義務教育を補強拡大するために、小・中学校に夜間部を置き、義務教育を強制することになった。そして第二次世界大戦が進行すると教育は法律によるもの以外の設立は認めず、教科目から教師の資格までを統制した。夜学校の様に、学校令に準拠するも守らず、無資格の教師による自由教育は認めないことになった。遠友夜学校の教育は不法になったのである。青年学校の義務化によって夜学校の中等部は兵役に無関係なも

のに限らざるを得なくなり、生徒募集も教師の獲得と共に困難になった。元来遠友夜学校は社会事業として認められていたので、教育機関ではなかったのである。」（札幌市教育委員会編　さっぽろ文庫 18　『遠友夜学校』）

この時、新渡戸稲造校長は既に亡く、後を継いだ萬里子夫人も 1938（昭和 13）年に亡くなって、翌年から、長年、学生教師として、また遠友夜学校代表として、遠友夜学校に深く関わって来た半沢洵が校長に就任した。校長就任挨拶は、同年の青年学校義務化および、その頃急増した夜間中学の存在のため遠友夜学校への入学希望者の減少を踏まえて、遠友夜学校の将来を如何に展望すれば良いか苦悩に満ちた内容であった。

「・・・然し乍ら斯る状態になっても夜学校の必要は失はれるものではなく、たとへ青年学校の義務化が行はれようとも当分の内は夫れに漏れるものあるべきことは恰かも小学校が普及しても初等部の生徒の急激な減少を見なかった例の如く、若し経済的原因により青年学校に入学し得ぬものがあれば之を収容することとし、その卒業生は青年学校卒業と同様の資格ある如くする様努めると共に、他方に於ては女子青年、晩学者、朝鮮人、其の他青年学校入学義務者以外の者で教育を要するもののあるべき故、それらの教育に当り完備され、法規によって教育方法の一定されたる教育機関とは種々の異なる特徴あるを以て － 例へば、教材選択の自由、教育方法の自由、個人個人に立ち入った全的教育、自治的調練等が挙げられます － 。これらを活かすことにより、学校本来の目的に向って進み得ると考へるのであります」（さっぽろ文庫 18　『遠友夜学校』）

迫り来る時代の要求をかわしながら、遠友夜学校の自由な教育を維持しようと、もがき苦しむ姿を見ることが出来る。しかし、昭和 17 年の軍事教練の通達にも従わない遠友夜学校に対し、時代は容赦はなかった。

「昭和十九年の初め、戦争がようやく末期の様相を濃くし、国家総動員の名の下にあらゆる物が戦火の中に投入されていたとき、北海道における最も古い歴史を持つ社会事業の１つとして札幌の豊平橋畔に貧児教育を続けてきた札幌遠友夜学校も、例外としてその運命を免れることができなかった。閉校命令と共に、校舎は逓信局に強制貸与を命ぜられたのである。」（高倉新一郎「札幌遠友夜学校『思い出の遠友夜学校』」

「国を危うくするのは軍部である」と語って（松山事件）国賊とまで呼ばれた新渡戸稲造を校長と仰ぎ、敵国大統領だった**リンカーンに学べ**を校是とする学校がこの時代に存続出来た方が不思議と言える。昭和 19 年 3 月、遠友夜学校を廃校にするようにとの命令が下る。ついに、北大生と札幌市民の良心により支えられ半世紀の長きに亘って継続した遠友夜学校はその幕を閉じる時が来たのである。軍国主義は自由な精神と、人々の善意の行いまでにも矛先を向けたのだ。

遠友夜学校の最後の日に立ち会った学生教師で、後に北大教授となった松井愈（まついまさる）氏の手記がある。

「昭和 19 年 3 月 6 日、新渡戸先生の筆太の横額“学問より実行”がかかげてある講堂で行われたこの年の卒業式は同時に遠友そのものの閉校式でありながら、あまりにもささやかな淋しいものだった。大戦下に、追いつめられ破壊された生徒たちの“生活”という面からも、学徒出陣に続く勤労動員に次々と狩り立てられる教師、北大生の条件からも、遠友はかなり以前から瀕死の状況に追い込まれていた。新渡戸先生の教えと人間性に育まれ、それをひたむきに守ろうとした遠友が、その存在そのものを抹消し去ろうとする時流との相剋の中で、ついにこの夜、姿を消したのであった。私は、私の傷つき敗れた青春のピリオドとして今もあの日々を生生しく思い起こす」（さっぽろ文庫 18 『遠友夜学校』）

また、遠友夜学校が最後の卒業式・終業式を行ったこの日の同校の庶務日誌に「自分は今、『夜学校五十年の流れを、ここに喰ひ止めた物は何か』と

考へて居る。夜学校の精神は、50年の長きに亘って、些かも変形されずに今日に迄至って居る。然し、理想は、変らないとは云へ、周りを囲む現実は、年々歳々変って行った。今となっては、この様な夜学校の存在する事すら奇異な程、世の中は変ったのである。現実を考へる時、今こそ夜学校が最後の幕を閉づべきであるとより思へない」とある。

遠友夜学校の精神や方針は**50年の間いささかも変わっていない。新渡戸先生の精神をひたすら守って来た。**一時は高く評価されたが、今度は、**その存在すらも抹殺しようとする時代**になってしまった。**このような学校の存在することすら奇異なほど世の中は変わったのである。**口惜しさと時代への怒りと無念を感じさせる文章である。このような状況下で、守り抜いて来たものを曲げてまで存続するよりは、ここで閉校とすべきであると考えたのであろう。昭和19年4月、遠友夜学校理事会は既に下った閉校命令を事後承諾する形で閉校を決議している。

遠友夜学校の終焉をめぐる論争

上記のような記録を参照しながらもなお、「遠友夜学校の廃校は軍部に睨まれた結果ではない」「関係者は健全な愛国心を持ち、総力戦体制下の国策に協力して廃校を選んだ」とする見解を発表する研究者（三上敦史（2003）：「札幌遠友夜学校の終焉～北海道帝国大学関係者による社会事業と総力戦体制-、『北海道大学百二十五年史論文・資料編 202-240』もいる。他の多くの記録が「軍事教練を課していない夜学校、それは存在に値する学校では無論ありえない。夜学校は軍国主義の波に飲み込まれて廃校になった」としているのに対し、三上の見解が北大の125周年史の論文として取り上げられているため、これが北大の公式見解ということになる。極めて残念なことである。遠友夜学校は昭和17年に「軍事教練を課せ」との要請があったにもかかわらず従っていない。当時の時代背景ではそれだけで軍に非協力的であるとして何をされるかわからなかった時代である。「国策に協力して」などという見解がどこから出てきたのだろうか。しかも、もし、粛々と国策に協力したのであれば、それは、「健全な愛国心」というより「盲目的な愛国心」と呼ぶべきであろう。「健全」とするところに三上の立ち位置がうかがわれる。私は、三上論文を読み、「こうして歴史は歴史家によって歪曲されてしまうのか」との感を禁じ得なかった。北大の正史に掲載された論文であり、放置することはできないと考え、反論を高等教育ジャーナルに掲載した（藤田正一（2015）「北海道大学百二十五年史掲載論文『札幌遠友夜学校の終焉』に反論す」　高等教育ジャーナル22号）。私の論文に触発され、元遠友夜学校の学生教師を父に持ち、元遠友夜学校生徒を母に持つ須田力氏が、新たな資料も提示して私の論文の論旨を支持する論文を掲載した（須田力（2016）「戦時期の札幌遠友夜学校の教育に関する一考察」高等教育ジャーナル23）。興味のある方はぜひこの三つの論文を読み比べていただきたい。

歴史は、事実を真実とは違った方向に書き換えることでも、また、事実や人物の存在を完全に無視することでも、歪曲され得る。歴史家の立ち位置によっていずれの方向にも歪曲可能であるが、国の検定をパスしなければならない教科書に載るような歴史であれば、政権の都合の良い記述が採用されやすいのは当然であろう。2016年3月15日づけ一般財団法人新渡戸基金発行の新聞**「太平洋の橋」「気になること」欄に「教科書に載らなかった新渡戸稲造」**という一文がある。今年の正月番組で、歴史上の人物をあてるクイズで、誰もあてることができなかった歴史上の人物がいた。それが新渡戸稲造だったというのである。学校で習っていないからわからなかったというのだ。ある高校教師が新渡戸五千円札が発行された当時の日本で使われていた中学高校の教科書全部を調べたが新渡戸稲造はどこにも載っていなかったという。「武士道」で西欧世界に決して引けを取らないどころか、尊敬すべき日本人の精神性を世界に紹介し、国際連盟の事務次長としてユネスコの前身、国際知的協力委員会を設立し、また、戦争になりかねなかったスウェーデンとフィンランドのオーランド島を巡る紛争を、有名な新渡戸裁定で平和裡に解決した。日本ばかりか東洋の文化の素晴ら

しさを世界に示した人物として、彼に比肩する日本人はいない。このような人物が教科書に掲載されていなかったのである。「太平洋の橋」編集部はこの原因を**「教科書を編集する人たちの認識不足以外の何ものでもなかった」**としているが、私には**「意図的な無視」**に見える。新渡戸は戦前松山での講演の後、**「日本の国を危うくするものは軍閥か共産主義である。今はどちらかといえば、軍閥と言わざるを得ない」**と発言して国賊と罵られた。以来、新渡戸は歴史から意図的に抹殺されてきた。遠友夜学校の最後を看取った学生先生・松井愈氏の手記の一節を思い出していただこう。**「新渡戸先生の教えと人間性に育まれ、それをひたむきに守ろうとした遠友が、その存在そのものを抹消し去ろうとする時流との相剋の中で、ついに、この夜、姿を消したのであった」**。新渡戸と新渡戸の思想は時の政権にとって好ましい存在ではなかった。戦後になってもその抹殺の呪縛から解き放たれるまでに数十年の歳月が必要だった。いや、まだその呪縛を強化しようとする勢力は存在する。戦後、新渡戸が本当に再評価されたのは、五千円札発行の時からではなく、米国映画「ラストサムライ」が世界的評価を受けてからであろう。この新渡戸評価の逆輸入についてはこのシリーズの冒頭（第１回）に書いた。多くの人が日本の良き伝統精神と新渡戸の思想を再認識した。それに危機感を抱く二つのグループの人々がいる。一つは新渡戸の、日韓併合時の朝鮮観における負のイメージが新渡戸の功績を否定してもなおあまりあると考える人々、そして、もう一つが**新渡戸の軸足が貧者、弱者の側にあることを知ってこれを危険と考える人々**である。前者についての言及はここで止める。今回、冒頭に福沢諭吉の言葉**「最も恐るべきは貧にして智ある者なり」**を紹介した。後者はこの考え方、つまり強者の側に軸足を置く人々である。**「学問のすゝめ」**と**「学問より実行」**にはその額面の違いの裏に軸足の立ち位置の違いがあると述べたが、この対立は今も継続しているのである。これが、新渡戸の思想を色濃く反映した教育基本法の改悪、福沢一万円札を残し新渡戸五千円札は廃止、十和田の新渡戸記念館が閉館に追い込まれていること、そして、札幌遠友夜学校の記念室が閉鎖されたことなどの背景にあるのではないか、と、これは私の下衆の勘ぐりである。

最後に：

札幌には新渡戸稲造によって設立され、多くの札幌農学校・北大の学生たちの無償の奉仕と市民の善意によって支えられた、貧しい子供達のための無料の学校があった。そこには、たどればクラーク博士が札幌にもたらした札幌農学校の民主主義と自由の精神、弱者の側に立つ教育精神と、新渡戸稲造の小さきもの、弱き者に対する愛情と人格主義的教育精神に行き着く清き精神が流れていた。ここで学んだ生徒たちは清く、正しく、力強く人生を生きた。教育技術という面から見ればズブの素人の学生たちが、今の教育が望んでも望み得ないような教育効果をあげつつ半世紀の長きにわたってこの学校は存続した。戦時体制下、平和主義と自由主義的教育を続けたこの学校は軍の圧力によって閉校に追い込まれた。美しく清き精神を曲げずに散ったが故に、札幌遠友夜学校は今でも心ある人々に記憶され、語り継がれる、この北国の北極星のような存在なのである。

＜終わり＞

後記：

札幌遠友夜学校の跡地は札幌市の依頼で財団法人遠友夜学校から札幌市に勤労青少年ホームの建設地として無償譲渡された。その時の約束で、その中に札幌遠友夜学校記念室が作られた。そこを訪れた人々は一様に魂を揺さぶられ、深い感動を覚えて記念室を後にした。2014 年夏、札幌市教育委員会はこの貴重な教育遺産の展示を撤去してしまった。札幌遠友夜学校の跡地は児童公園となった。その一角に札幌遠友夜学校の記念館を再建したいという市民運動の努力でそのための敷地が確保されている。

筆者は新渡戸稲造の設立した遠友夜学校の精神を現代に継承するために、北大生ボランティアの協力を得て、2005 年 4 月、無料の公開市民講座・平成遠友夜学校を開始し、今年で 12 年目になる。

談 話 会 報 告

宮坂 省吾氏の談話会報告

図書ボランティア　　沼田　勇美

平成28年1月29日の午後。談話会**「旧豊平川のほとりにあった遠友夜学校」**は、北大総合博物館共同研究室で開催されました。講師は宮坂省吾氏。北大理学部地質学鉱物学科卒、「札幌の自然を歩く・北海道大学出版会」などの著書があります。お話の内容は、大きく分けて「新渡戸稲造博士が創設した遠友夜学校」と、「自然河川だった豊平川」を古い地図などの資料を使って説明して頂いた。

150 年前の豊平川　古い時代、豊平川は急流河川で、毎年のように氾濫し、流路を大きく巡らして、扇状地を成長させてきた。自然堤防も形成されていた。遠友夜学校は、札幌市街の南東のはずれで、旧豊平川のほとりにあった。その地は明治初期までは豊平川氾濫原の中州だったと云う。

宮坂さんの資料（平成28年3月）から　宮坂さんは3月26日付けで、サッポロ巡検と称して、新善光寺をスタートして南7条橋、豊平橋、新渡戸記念公園、大通り東8丁目、住友生命ビルなどを探索しながら歩いたようです。

講師の話では、豊平川は今の豊平橋付近で湾曲した支流があり、中州が形成されていた。その中州の縁に遠友夜学校が設置された。その後、支流が埋め立てられたとのこと。そんなことを頭に入れて、豊平方面からススキノ方向に豊平橋を渡ると、堤防にある交番から急に道路が下降している。

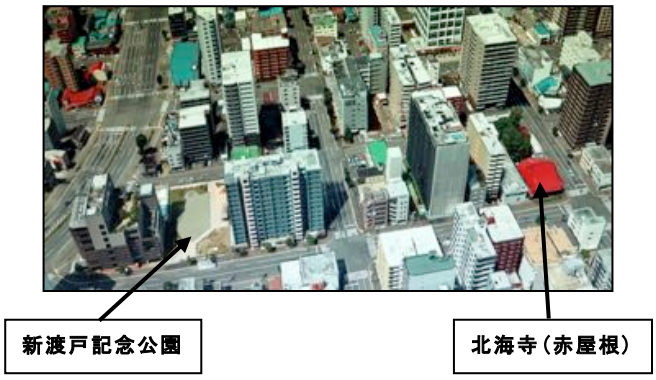
講師の資料によると、「石狩山伐木図(宝暦年間1751-1764)」が、一番古い図。この後、1801年頃に大洪水があり(遠山、1806 ： 江別市総務部、2005)サッポロ川の流れが変わった。「豊平川」と呼んだ最初の記録は1870(明治3)年、そして豊平橋から上流を「札幌川」、下流を「豊平川」と云ったらしい。開拓使の作成した「北海道札幌之図1873(明治6)年」の地図には豊平橋の上流も下流も「豊平川」と記されている。

遠友夜学校　新渡戸稲造博士が、萬里子夫人の資金を元に1894(明治27)年、南4条東3丁目に設立し、50年間の長期間、貧しいが向学心のある札幌の子供たちを北大生たちが、無料で夜間教育した学校です。この名にちなんで付けた北大構内、北18条に在る「遠友学舎」は、おなじみの施設です。

近所のお寺　昭和4年の写真を見ると校舎の北側に寺の屋根が見える。その寺を探しに現地に行って見た。「北海寺」と云う名の寺が有った。次にGoogle画像を見たが、現存の「北海寺」では無いらしい。古い写真と比較すると、寺は遠友夜学校の北側近くの様に見受けられる。下のGoogle Earth画像では、「北海寺」は約1丁も離れている。このことから寺は北海寺とは別の寺だと考えられる。

昔の遠友夜学校(昭和4年)

下のGoogle Earth画像は、最近の新渡戸記念公園と北海寺を中心とした立体写真です。



Google Earthで見た記念公園と北海寺

札幌っ子の小生は、子供時代に豊平橋下で泳いだ事もあり、橋も川も懐かしく拝聴しました。

活 動 報 告

恐竜研究で初の日本古生物学会学術賞

総合博物館　資料開発研究系　　小林　快次

平成28年1月に、「恐竜類の古生態学的研究」というテーマで、日本古生物学会から学術賞を受賞した。これまで恐竜研究でこの賞をもらった人はいなかったため、“恐竜”というテーマでは初の受賞となった。また、北大在職者としては、昭和44年に加藤誠先生（古生代サンゴ）、昭和53年に棚井敏雅先生（古植物）が受賞した以来で、38年ぶりとなる。受賞後、北大にいらした先生では、昭和55年の初代総合博物館館長の小泉格先生（当時大阪大学：珪藻）や昭和62年の元副学長の岡田尚武先生（当時山形大学：石灰質ナノプランクトン）らがいた。

受賞テーマの内容は、2月22日の北海道新聞の夕刊に取り上げられたので、割愛するが、この受賞は、私にとって二つの意味を持っている。

まずは、日本人による恐竜研究が世界的に影響を及ぼし始めていること。私が学生の頃は、恐竜研究者になるという目標を持つこと自身が烏滸がましいという時代だった。恐竜の研究を手がけている研究者はいたが、その内容は断片的な恐竜化石の産出報告にとどまることが多く、恐竜の進化においてインパクトを与えるような研究には至っていなかった。しかし、90年代以降、日本各地から恐竜化石が次々と発見されるとともに、恐竜研究者を目指し留学する学生が増えた。何を隠そう、私もその一人である。20年以上も前に蒔いた“種”が、ようやく芽生えてきており、日本全体の恐竜研究のレベルアップにつながっている。

もう一つの受賞の意味は、北海道大学が恐竜研究の核になっているということ。達成できた理由には、博物館の職員やボランティアの皆さんの理解と協力による素晴らしい環境があるからだと感じている。この博物館に来てもうすぐ12年目に入るが、気分的にはまだ来たばかりのような感覚だ。それは、素晴らしい人に囲まれて、楽しい日々を過ごしているという、まぎれもない証拠だと思う。伸び伸びと調査・研究をさせてもらい、それを皆さんと共有する。楽しいが故に、日にちが経つのも早い。そして、北大に集まってくる院生や学生の熱意と才能、そして彼らの素晴らしい人格も、核になっている理由だと思う。恐竜研究をしたいという強い意志を持ち、努力を惜しまない。研究だけではなく、博物館活動も率先して行い、コミュニケーション能力を培っている。集まってきた院生と学生は、お互いの夢を語り合い、そして励まし助け合って研究活動を続けている。そして何より、お互いを尊敬・尊重し合い、相乗効果で向上している所が素晴らしい。彼らを見ていると学ぶことが多い。

今回の学術賞は「恐竜」というテーマでは初となったが、今後はすでに日本で活躍している優秀な若手研究者から受賞者が出てくるのは間違いない。しかし、私が望むのは、北大出身の受賞者を出すことだ。北大を卒業し恐竜を含む脊椎動物化石を研究している者がすでに数名いる。海外に留学し世界最先端の研究を行っている者も数名。また、現在在学中の優秀な院生と学生が数多くいる。さらに、恐竜研究を希望し、北大入学を目指している高校生からも連絡が来ている。北大における恐竜研究の未来は明るい。今後が楽しみである。

小林研究室のメンバーでの恐竜発掘調査。2015年9月、モンゴルゴビ砂漠にて。筆者：左から4人目

恐竜が繋ぐ北大総合博物館と鵡川町

むかわ町役場穂別総合支所　地域おこし協力隊　　太田　晶

私は2015年4月から北大理学院に進学すると同時に休学し、むかわ町で「地域おこし協力隊」として恐竜化石を活用したまちづくりに取り組んでいます。地域おこし協力隊とは都市部の人材が地域へと生活の拠点を移し、協力活動を行いながらその地域への定着を図る制度です。むかわ町では人口減少をくいとめる方策の一つとして、地域資源に着目しまちの魅力を高めることを目指しています。その地域資源の柱の一つが、北大と穂別博物館が共同発掘したハドロサウルス科恐竜をはじめとする数々の化石なのです。

私の主な仕事は「恐竜化石を活かした実践活動の企画・運営」です。昨年度は町内の施設に恐竜化石のPRコーナーを設置したり、道の駅の夏休みイベントに合わせて化石コーナーを出展したりしました。また、子供たちに地元の化石について知ってもらうために、放課後町内の子供教室で小学生を対象にした「恐竜・化石教室」を実施しました。トランクキットを参考に製作した教材や実物の町内産化石を使用し、参加児童の化石への興味をうまく引き出しながら恐竜について知ってもらうことができました。

北大総合博物館との連携・協力関係の構築も私の協力隊員としての仕事の一つです。現在は町民を対象にしたレプリカ制作講座に向けての準備を化石ボランティアのみなさんのお力を借りて進めています。また7月の総合博物館リニューアルオープンに向けて、北大総博3階でむかわ町穂別の恐竜や昨年12月に発表されたむかわ町産の新種モササウルスについて紹介するコーナーを小林准教授や学生のみなさんと共に製作中です。さらに化石ボランティアの方が試作している化石をかたどった木工パズル教材に関しても、むかわ町の木育事業で関わりがある方をご紹介して情報交換をしていただき、新たな繋がりができそうです。今後も総合博物館とむかわ町の連携を通じて、恐竜をきっかけに生まれた結びつきを更に強め、双方が活発化するような流れを作っていければと思っております。

化石ボランティアからレプリカ作りの指導を受ける筆者（中央）

新しいボランテイア室のお知らせ

Ｓ224Ｃがボランテイア室です。
正面玄関から入って２階に到着したら、右方向右側２つ目の部屋です。
使い方：１階事務から５６の鍵を借りたら部屋は開けられます。
※事務の休日には鍵をかりられないので、使用できません。
使用の優先権は、Ｓ224Ｃ室内の白板に書き込んだ順です。
もし、先に誰かが書き込みをしていた時は、別の時間帯で使用してください。

あと片付けをきちんとお願いします。
整理整頓を心がけてください。

Let's しゃみチェン！～ポプラでつながる和洋の楽器～

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究主査　　甲地　利恵

去る3月21日（月祝）、北海道大学情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室で**「Let's しゃみチェン！～ポプラでつながる和洋の楽器」**が開催された。チェンバロと三味線というユニークな組み合わせをつないでいるのは、どちらも北大のポプラ並木のポプラで作った、北海道大学総合博物館所蔵の楽器であるという共通点である。

企画の発案者である、同博物館の前館長でもある津曲敏郎先生からポプラで作った三味線があることを伺ったのは2015年12月、ある学会の会場だった。2004年9月8日、北海道を襲った台風18号で倒れた北海道大学のポプラ並木のポプラを材としてチェンバロが作られたことは比較的よく知られているが、津曲先生によれば、他にもいくつかポプラで楽器が作られ、そのうちの一つに三味線があるとのこと。

現在、同博物館は改修のため休館中、ポプラチェンバロは情報教育館のスタジオ型教室に移されている。演奏を交えてのセミナーにはうってつけの場所なので、肩の凝らないトークと演奏というかたちで、チェンバロと三味線でコラボレーションはいかが――というのが津曲先生の企画案だった。演奏家でもない私にお声がかかったのは、それまで職場の仕事や学会を通じて先生にいろいろとお世話になる中で、私が趣味で小唄（蓼派小唄）をやっていることをご存じでいらしたからだ。とはいえ、ここ数年多忙で稽古から遠ざかっているのに人前で演奏などしてよいものか。躊躇と不安は相当あったが、ポプラ三味線への興味がそれに勝り、小唄の師匠（蓼（たで） 胡輝笑（こきえみ）師匠）の許しも得て、私のしゃみチェン参画は具体的に進みだした。

2016年1月下旬に、10年近く眠っていたポプラ三味線にお目通りした。「細棹」と呼ばれる種類の三味線である。皮は犬皮（けんぴ）。棹と胴の木肌の白さが新鮮である。通常、三味線の棹や胴には木質の堅い、濃い色の材が用いられる。ポプラは柔らかな木質のため、そのままでは三味線の材となりにくいため、道立林産試験場で堅く加工してから作られたという。製作したのは室蘭市で楽器店を営む三絃師の波多野義人さん。今回の行事を前にして楽器の状態を診ていただきにお店に伺ったところ、たいへん親切に応対いただき、イベント当日はわざわざ室蘭からお越しくださった。

「しゃみチェン」コラボ、私にとっての頼みの綱は同博物館ボランティアのチェンバリスト・新妻美紀さん。既に何度もポプラチェンバロの演奏会を手掛けている新妻さんの音楽牽引力に、私は終始頼りっぱなし。三味線の調弦を試行錯誤の末、前々日になって移調を恐る恐るお願いするなど無茶振りをしても、快諾のうえ柔軟に演奏に臨んでくださった。

北海道大学創成研究機構の小俣友輝先生には美しいデザインのチラシをご製作いただいた。また、博物館や情報教育館の諸先生方、ボランティアの方々にもご協力・ご助力をいただいた。何より、企画立案に始まり、練習にも立ち会われ、当日は会場設営から司会進行と何から何まで手掛けてくださった名プロデューサー・津曲先生なしにはこのイベントは成立しなかっただろう。そして、三連休の最後、しかも雪が降る中、会場にお越しいただいた聴衆の皆さまに、心から感謝を申し上げたい。ありがとうございました。

北大生の学びを見守ってきたポプラの三味線。北大生自身が奏で継承していくことがふさわしかろう。心得のある学生さん、ぜひいかが。

左　：イベントのチラシ
上左：ポプラ三味線で歌う筆者
上右：司会の津曲先生

昔のお宝新聞データ・ベース（中間報告）

図書ボランティア　　久末　進一

北大総合博物館で発見された古新聞のデータベース化の概要は、ボランテイア ニュース 38 号（2015 年 9 月発行）p.11 で報告したが、その後入力は進み、平成 28 年 2 月現在入力済みは新聞総数 980 部となったが、未入力分はまだまだある。また、新聞紙の種類は主要紙 52 紙、1 部のみのものを含め 120 紙に及ぶ。

いずれも博物館内で発見されて持ち込まれた植物標本挿み紙（押し葉新聞）を主に、岩石、海藻標本等の包み紙として使用された廃棄新聞類である。これらが各新聞ごとに年月日順に特製大型ファイル 20 冊に収納され、これをデータ・ベースから ABC 順に新聞名、年月日、号数で検索可能になった。

全面広告と新聞小説も入力済みだが、とびとびではあるが、時代世相をのぞき見できる。

特に「萬朝報」「時事新報」「報知新聞」「日出國新聞」「北海タイムス」「國民新聞」「日本」「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」「東京日日新聞」「読売新聞」の明治期のものが含まれているのが珍しい。

情報のタイムカプセルであり、古新聞のため保存が悪いが、当時の正確な史実探求のためにも、これらが文化財として役立つことは確かである。

情報手段のこれほど氾濫した現代でも、新鮮に読める記事や広告には驚かされる。今後、機会があれば、こうした昔のお宝新聞の内容紹介をはかりたい。

身辺を見廻せば、キャンパス内には研究室や倉庫が多く、棚の資料や標本、発掘遺物も数知れず、それらを保護する詰め物、梱包等に使われた昔の新聞紙類が埋れている。こうした“お宝新聞”の再発見、再評価も問われている。

実物収集とパソコン記録活動は今後も続く。古新聞の情報提供を待っているところである。

興味のわいた方は、どうぞ、のぞきに来てください。

筆者は右端

出てきたチャップリン古新聞

その他の報告

総合博物館　展示リニューアル！

総合博物館　鉱物・岩石担当　　山本　順司

当館は7月26日にリニューアルオープンを迎えます。この展示リニューアルにおける２つのコンセプトを紹介します。

「本学を全部魅せる」この度の展示リニューアルにおいて12学部すべての展示室を設けます。また、本学の精髄とも言える部局の魅力をどんどん発信できる拠点を作ります。

「より愛される博物館へ」完全なバリアフリー化を施します。また、カフェを誘致したり、開館時間を延長したりすることで、皆さんに気軽に利用していただける空間を構築します。このほかにも、多くの展示室を整備し、北大をたっぷり感じていただける博物館へと進化します。皆さんのお越しを楽しみにしています。

リニューアルオープン後の総合博物館基本情報：
開館時間：10:00～17:00（通年）ただし、6 月～10月の金曜日は10:00～21:00
休館日は月曜日(月曜日が祝日の場合は直後の平日)、及び年末年始
開館情報は下記ホームページからでも確認頂けます。
http://www2.museum.hokudai.ac.jp/countdown/

北大総合博物館年次報告会

総合博物館　資料部研究員　　石川　満壽夫

本年4月11日（月）北大総合博物館の年次報告会が開催された。従来は年度内に開催されていたが耐震工事の終了を待って新たに設けられた１階の多目的スペース(N127)にて参加者約 50 名を集めて開催された。

中川館長による開会の挨拶に今後この多目的スペースが、各種セミナー、講演会はもとより4Dシアターの上映にも活用されるとの紹介がなされた。そして総合博物館のリニューアルオープンが本年7月26日（火）と正式に決定したとの発表があった。教職員、ボランティアの皆様に耐震工事中の不便を労い、7 月のリニューアルオープンを目指して展示物の再配置、イベントの準備などへの協力を呼びかけられた。

年次報告会の詳細は総合博物館ニュースに掲載されるのでこの紙面では割愛しますが、ボランティアメンバーの表彰があった。当日会場に参加した在田会長が10年表彰、船迫吉江さん（植物）、福澄孝博さん（4D）、高崎竜司さん（化石）が 5 年表彰を受けた。会場に来ない人でも永年表彰の対象者はいるのですが個人情報の保護の観点から個人名の公表はされません。

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース　No.41
◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員：星野、今井、大山、児玉、沼田、山岸)
◆発行人：在田一則
◆発行日：2016年6月1日
◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 http://www.museum.hokudai.ac.jp